

II 平城京・京内寺院等の調査

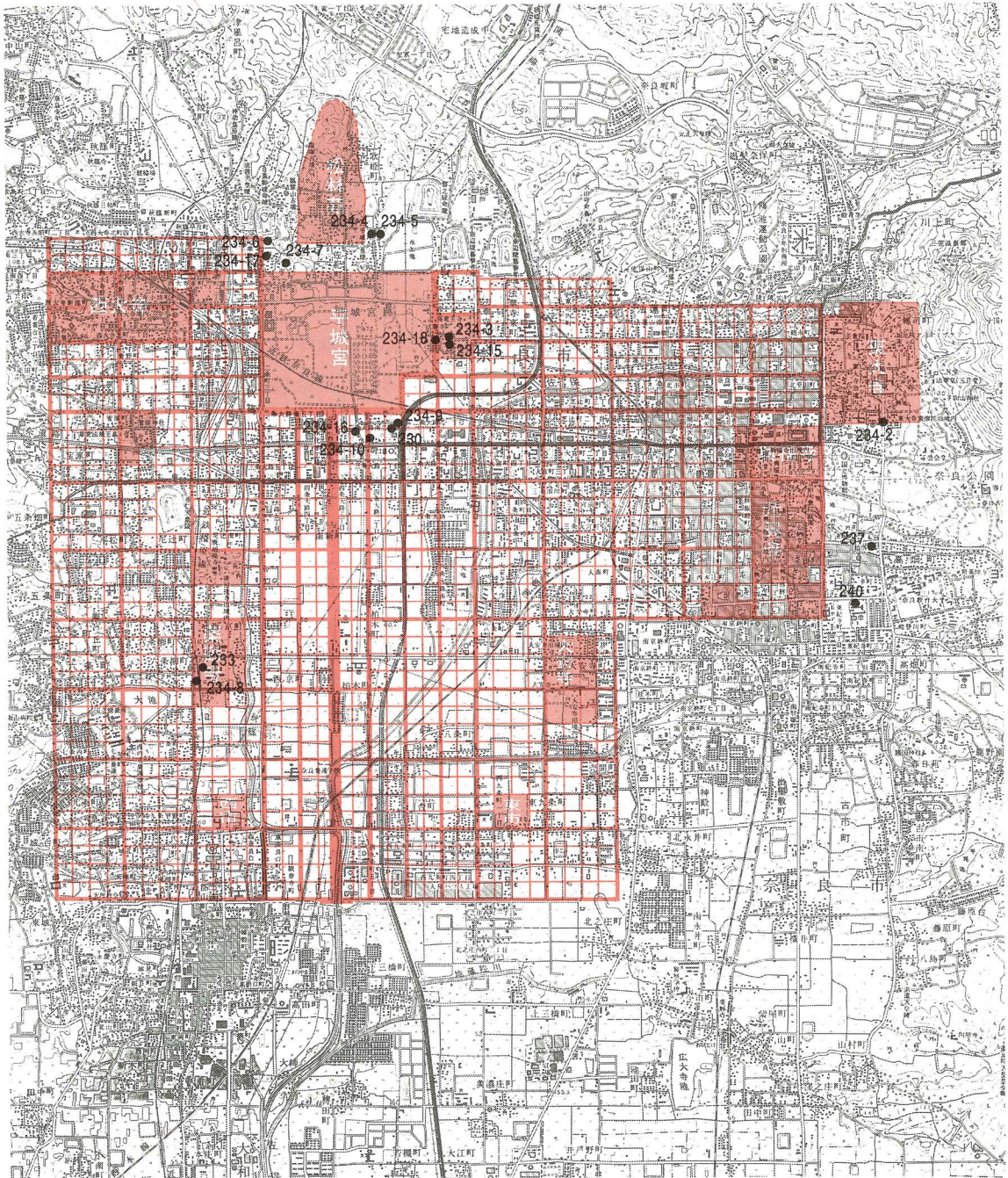


図26 1992年度平城京・京内寺院等調査位置図 1 : 50000

表7 1992年度平城京等発掘調査一覧（*は巻末別表に概要掲載）

| 調査次数 | 調査地区 | 地区名 | 面積 | 調査期間 | 調査担当者 | 備考 |
|----------|--------------------|-------|-------|-------------|-------|-----------------|
| 230 | 左京三条一坊 十・十五・十六坪 | 6 AFJ | 1,700 | 7. 6～ 8. 31 | 小野 健吉 | 駐車場 |
| 240 | 東紀寺遺跡 | 6 AER | 1,500 | 2.10～ 3.30 | 小池 伸彦 | 奈良女子大学附属 中学校 |
| * 234-4 | 平城宮北方 | 6 ASB | 6 | 4.20～ 4.21 | 森 公章 | 中川安治宅 |
| * 234-5 | 平城宮北方 | 6 ASB | 36 | 6.22～ 6.25 | 玉田 芳英 | 溝川達也宅 |
| 234-6 | 平城宮北方 | 6 ASA | 12 | 6.25～ 6.29 | 白杵 勲 | 八幡神社 |
| * 234-7 | 平城宮北方 | 6 ASA | 6 | 7. 1 | 佐川 正敏 | 城山良一宅 |
| 234-9 | 東一坊大路西側溝 | 6 AFJ | 100 | 10. 5～10.19 | 杉山 洋 | 駐車場 |
| 234-10 | 左京三条一坊十坪 | 6 AFJ | 90 | 11.18～12. 1 | 山崎 信二 | 石田澹宅 |
| * 234-16 | 左京三条一坊七坪 | 6 AFJ | 30 | 2.25～ 3. 1 | 館野 和己 | フクワエンジニアリング |
| * 234-17 | 平城宮北方 | 6 ASA | 32 | 3. 4～ 3. 8 | 毛利光俊彦 | 笠井博之宅 |
| * 234-18 | 平城宮東辺 | 6 ALE | 20 | 3.15～ 3.19 | 館野 和己 | 中西清志宅 |

表8 1992年度平城京内寺院等発掘調査一覧（*は巻末別表に概要掲載）

| 調査次数 | 調査地区 | 地区名 | 面積 | 調査期間 | 調査担当者 | 備考 |
|---------|--------|------|-----|-------------|----------------|--------|
| 233 | 薬師寺境内 | 6BYS | 700 | 7. 1～ 9. 4 | 松本 修自 | 伽藍復興 |
| 237 | 頭塔 | 6BZT | 40 | 10.28～ 3. 2 | 高瀬 要一 内田 和伸 | 史跡整備 |
| 234-2 | 東大寺境内 | 6BTL | 13 | 4. 2～ 4.22 | 白杵 勲 | |
| 234-3 | 法華寺旧境内 | 6BFO | 58 | 4.15～ 4.22 | 上野 邦一 | 川崎裕久宅 |
| * 234-8 | 薬師寺旧境内 | 6BYS | 50 | 7. 6～ 7.10 | 寺崎 保広 | 岡島勝彦宅 |
| 234-15 | 法華寺旧境内 | 6BFO | 40 | 2.22～ 2.23 | 藤田 盟児 | 法華寺下水道 |

6 左京三条一坊十・十五・十六坪の調査 第230次

本調査は、奈良市二条大路南二丁目で実施した、駐車場造成工事ともなう事前調査である。調査地は平城宮跡のすぐ南に位置し、平城京の条坊復原によると左京三条一坊十五坪の北半部と同十坪の北半東辺部、同十六坪の南辺部にあたる。このため、十五坪の主要部の様相の解明、十五坪と十六坪の間の三条々間北小路及び十坪と十五坪の間の東一坊々間東小路の位置の確認等を調査目的とし、調査区はこれらの目的を達成するため、Ⅰ・Ⅱ区は十五坪と十六坪にまたがって、Ⅲ区は三条々間北小路と東一坊々間東小路の交差点付近に、またⅣ区は十五坪の中心部から東一坊々間東小路を越えて十坪の西辺部にかけての位置に設定した。調査期間は、1992年7月6日から8月31日である。

1 基本層序

調査地の基本層序は、以下のとおり。

Ⅰ区 上から耕土・床土・暗褐粘土（整地土）・灰色砂（地山）と重なる。奈良時代遺構検出面は暗褐粘土上面、標高60.9～61.1m。

Ⅱ区 上から耕土・床土・暗黄灰土（整地土）・暗灰砂（地山）と重なる。同検

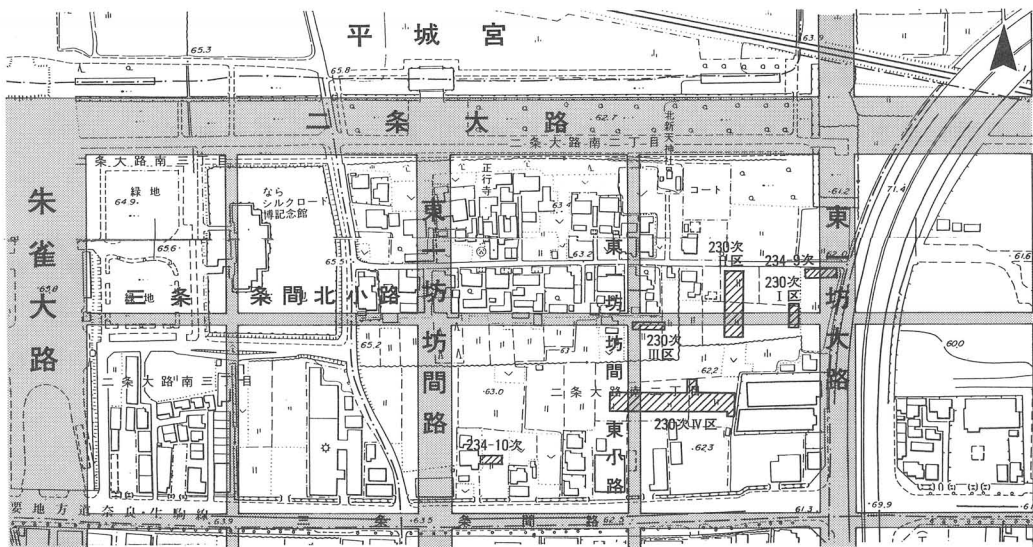


図27 第230次・第234-9,10次調査位置図 1:5000

出面は暗黄灰土上面, 標高61.2~61.4m。

Ⅲ区 上から耕土・床土・灰褐砂質土・黄灰砂(地山)と重なる。同検出面は黄灰砂上面, 標高61.3m前後。

Ⅳ区 上から耕土・床土・礫混暗灰土・黄褐粘土(地山)と重なる。同検出面は黄褐粘土上面, 標高60.9~61.1m。

2 遺 構

検出した奈良時代の主な遺構は, 以下のとおりである。

SA 1 十五坪と十六坪の間に設けられた東西方向の築地塀。坪の中軸線(東一坊大路心と東一坊坊間東小路心との中心を通る線)に当たる位置に門(SB 8)が開く。この門の位置決定方法から考えて, この築地塀は平城京造営当初からのものとみなすことができる。〈Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区〉

SD 2 a・b・c 築地塀SA 1の北雨落溝。2回の改修がある。SB 8の北の部分では, 当初幅2m強であったSD 2 aを全体に北に寄せながら約3mに拡幅, しがらみで護岸を行なってSD 2 bとし, さらに後にはSD 2 bの北肩付近で幅約70cmのSD 3 cを掘り直している。SD 3 cの時点では雨落溝としての機能は持ちえない。〈Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区〉

SD 3 a・b 築地塀SA 1の南雨落溝。当初約1.5mの幅であったものを, 後に幅約70~80cmにせばめている。掘立柱南北塀SA 9との交点ではSD 3 aの施工時から, 柱の根元を水が流れないように幅をせばめている。〈Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区〉

SE 6 十六坪中央南部にある, 内法一辺1.8m(6尺)の蒸籠組の井戸。横板は7段(1段の高さは24.5~26.0cm)が現存する。深さ約3m。長屋王邸跡で検出の井戸SE4580は一辺が1.35m, 今回の井戸はそれより遙かに大きく京内発見の井戸では最大である。〈Ⅱ区〉

SB 7 SE 6のすぐ西にある7間四面の

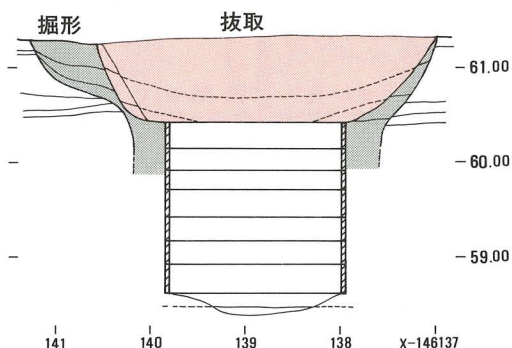


図28 井戸SE6断面図(Y=-18123地点)

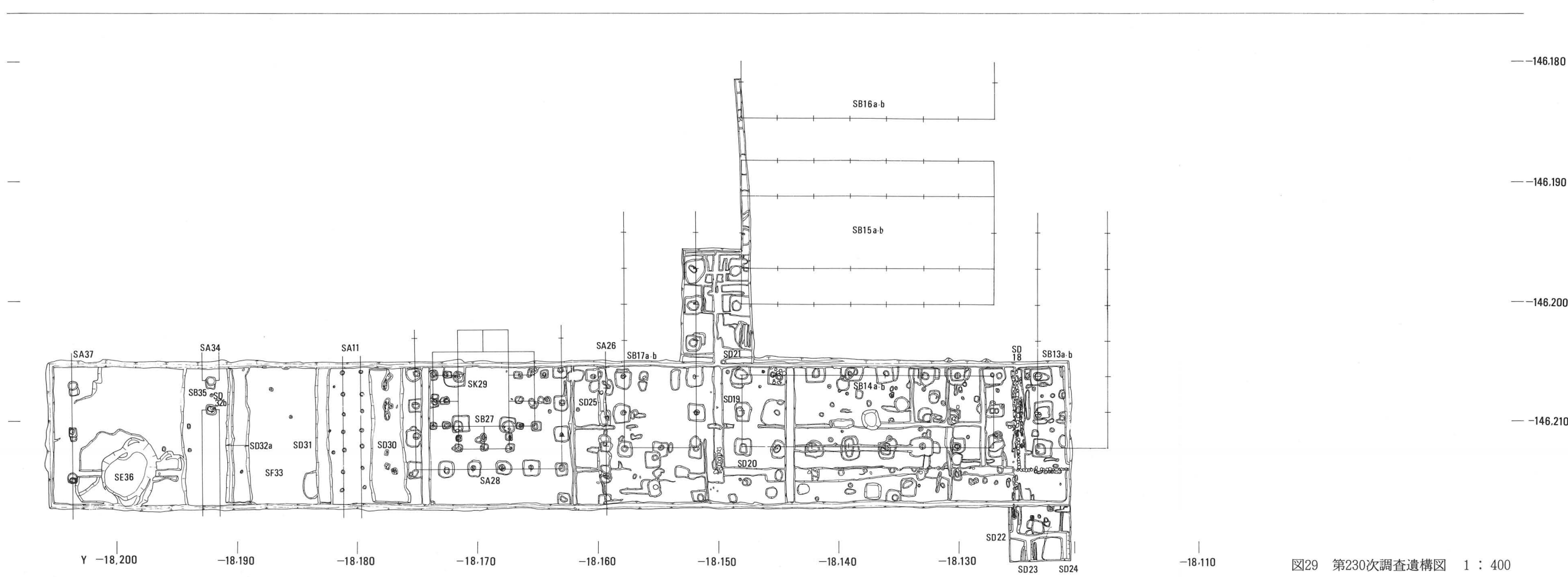
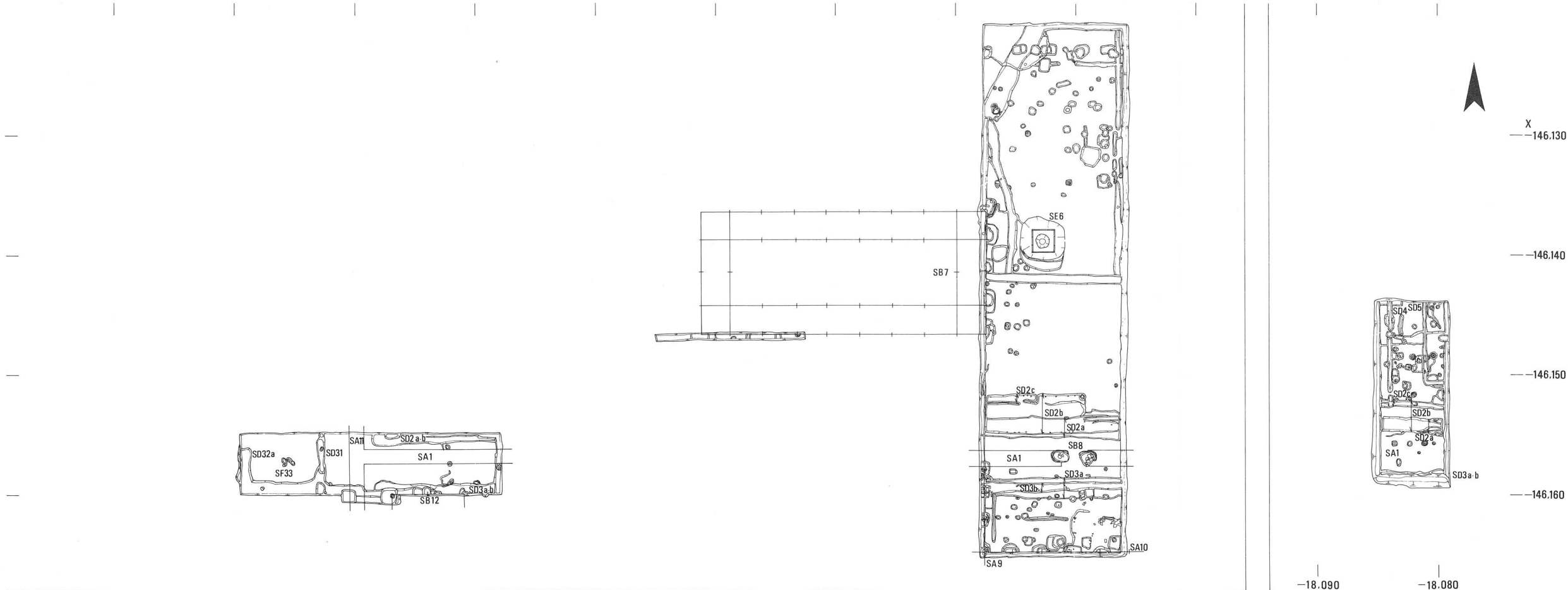


图29 第230次調査遺構図 1 : 400

東西棟掘立柱建物。桁行方向の柱間寸法は身舎9尺, 庇8尺で, 総長79尺。梁間方向の柱間寸法は身舎9尺, 庇8尺で, 総長34尺。〈Ⅱ区〉

SB8 築地塀SA1に設けられた礎石建ち・1間の門。柱間寸法は8尺ないし9尺。〈Ⅱ区〉

SA9 築地塀SA1の南面に取り付く南北方向掘立柱塀。柱間寸法7尺。〈Ⅱ区〉

SA10 十五坪北部の東西方向の掘立柱塀。柱間寸法8尺。〈Ⅱ区〉

SA11 十五坪, 十六坪の西端を限る南北方向の築地塀。十五坪から十六坪にかけて途切れずに続いている。このことは, 三条々間北小路がここで行き止まりになっていることを示す。〈Ⅲ・Ⅳ区〉

SB12 十五坪西北隅の南北棟掘立柱建物。梁間2間で, 桁行は調査区外となるため不明。梁間の柱間寸法は10尺。切合いから, SD3aよりも古い。〈Ⅲ区〉

SB13a・b / SB17a・b SB13a・b ~ SB17a・bは, 十五坪中央西寄りの大型建物群。SB13aは梁間2間, 桁行5間以上の南北棟掘立柱建物。柱間寸法10尺。SB13aとSB17aはSB14a及びSB15aの東西に配され, それぞれの南妻をSB14aの南側柱筋とそろえる。SB13aとSB17aを同位置で礎石建ちに建て替えたのがSB13bとSB17b。〈Ⅳ区〉

SB14a・b SB14aは桁行7間梁間2間の東西棟掘立柱建物。柱間寸法は10尺。SB14aを同位置で礎石建ちに建て替えたのがSB14b。〈Ⅳ区〉

SB15a・b SB15aはSB14aの北側20尺のところに位置する東西棟掘立柱建物。桁行(東西方向)はSB14aと同じく7間(柱間寸法10尺), 梁間(南北方向)は4間(身舎・庇とも柱間寸法10尺)。SB15aを同位置で礎石建ちに建て替えたのがSB15b。〈Ⅳ区〉

SB16a・b SB16a・bはSB15a・bの北側12尺の位置にあったと推定される掘立柱及び礎石建ちの建物。西側柱筋がSB15a・bとそろっており, 桁行は7間(柱間寸法10尺)であろう。〈Ⅳ区〉

SD18~21 SB13b ~ SB17bの雨落溝と見られる石組溝。この石組溝は, 礎石建物

にとまなうものと見られる。南北溝SD18はSB13bとSB14bの中間に位置し、東西溝SD20を越えて南下し、東西溝SD22に注ぐ。南北溝SD19はSB14bとSB17bの中間に位置するが、SB15bの西部ではやや西に曲がる。なお、SB13a～17aの雨落溝も同位置に設けられていたと考えてよいだろう。〈Ⅳ区〉

SD22 南北溝SD18からの水をうける東西溝。〈Ⅳ区〉

SD23・SD24 東西溝SD22からの水を南に流す2条の南北溝。〈Ⅳ区〉

SD25 SD17a・bの西側の雨落溝。SD20を越えて南に伸びる。〈Ⅳ区〉

SA26 SB17の西にある南北方向の掘立柱塀。柱間寸法8尺。SD25よりも新しい。〈Ⅳ区〉

SB27 十五坪西部。東西方向14尺、南北方向21尺と考えられる1間1間の掘立柱建物か。周囲に2本1組となった支柱または縁束状の柱をとまなう。〈Ⅳ区〉

SA28 SB27を囲む、東西方向5間南北方向4間以上の塀囲い。柱間寸法は東西方向8尺、南北方向9尺。〈Ⅳ区〉

SK29 SB27西側柱筋上に位置する、径1.8m前後、深さ2m以上の土坑。底に厚さ50cm以上の木クズ層が堆積する。埋土上に置かれた数個の自然石は性格不明。〈Ⅳ区〉

SD30 築地塀SA11の東雨落溝。幅は3m前後と広い。〈Ⅳ区〉

SD31 東一坊々間東小路東側溝。素掘りで幅1.0m。〈Ⅳ区〉

SD32a・b 東一坊々間東小路西側溝。当初およそ1.5m幅であった（SD32a）が、後に位置を西にずらして幅80cmにせばめている（SD32b）。

SF33 当初の東西両側溝の心心間距離7.05m。20大尺の計画幅であったことは間違いない。〈Ⅲ・Ⅳ区〉

SA34 十坪の東辺を限る南北方向の築地塀。〈Ⅳ区〉

SB35 築地塀SA34に設けられた掘立柱、1間の門。柱間は8尺。〈Ⅳ区〉

SE36 一辺約6mの隅丸方形の掘形をもつ井戸跡。梓木はすべて抜き取られており、抜取穴の埋土からは木簡5点が出土。〈Ⅳ区〉

SA37 十坪内、SE36のすぐ西の掘立柱南北塀。柱間13尺。〈Ⅳ区〉

検出遺構の時期 後述する軒瓦の状況から、瓦葺き建物が奈良時代前半に建ち、末期まで葺き替えを行いながら存続する。したがってSB14 bを瓦葺き建物に想定すれば、これに先行するSBB14 aやそれと同時期のSB13 a, SB15 a, SB16 a, SB17 aといった掘立柱建物群は、より早い時期のものとなる。また、同様に出土遺物から、SE 6は奈良時代後半の、SE36は奈良時代前半の井戸。個々の新旧関係では、堀SA26は石組溝SD25より古く、SB12はSD 3 aよりも古い。また、堀SA10は堀SA 9よりも古い。

3 遺物

木器 二つの井戸SE6及びSE36から齋串、曲物などが出土した。

土器 土器は中心建物付近には少なく、多くは築地雨落溝、道路側溝、井戸から出土した。SE36では、井戸枠抜取穴から墨書1点（解読不能）を含む平城Ⅱの土器が出土した。SE 6では、掘形から8世紀中～後半の、井戸枠内埋土から平城Ⅴ～長岡期の土器が出土した。これらから、SE36はおそらく奈良時代の半ば以前に廃絶したもの、またSE 6は奈良時代後半に掘られ、長岡遷都以後に廃絶したものと考えられる。このほか、包含層から円面硯片が出土した。

瓦埴類 天平初年に作られた軒瓦が最も多い。これらに伴う特徴的な丸瓦と平瓦も多数出土しているので、付近に瓦葺きの建物があつた可能性がある。瓦の分布からみてその建物は、十五坪のSB14 b, 十六坪のSB 7と考えられる。平城還都後の軒瓦も出土しているので、奈良時代後半に屋根の補修が行なわれた可能性がある。井戸SE6の井戸枠内埋土から奈良時代末期の軒丸瓦が出土している。また、奈良時代前半の鬼瓦の破片が出土した。このほか、溝や柱抜取穴から埴の出土が目立った。

木簡 井戸SE36から5点、井戸SE 6から1点出土。このうち判読できるのはSE36からの2点（下記）である。

1 表：□枝宅車二両

裏：□（八または六か）年六月廿一日□□（赤染か）□

2 蓮子壹斗

表9 第230次調査出土瓦集計表

| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | | 道具瓦 | |
|--------|----|----|------|----|----|-----|------------|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 種類 | 点数 |
| 6012 | Aa | 1 | 6572 | D | 1 | 鬼瓦 | 2 |
| | B | 3 | 6641 | ? | 1 | その他 | 1 |
| | ? | 1 | 6664 | D | 1 | 文字瓦 | |
| 6135 | A | 8 | 6667 | A | 2 | 点数 | — |
| | ? | 1 | 6671 | K | 1 | 塼 | |
| 6174 | A | 2 | 6679 | A | 1 | 重量 | 243.52kg |
| 6282 | H | 2 | 6688 | Ab | 1 | 点数 | 288 |
| | ? | 2 | 6721 | E | 1 | 丸瓦 | |
| 6296 | B | 1 | | Fa | 1 | 重量 | 522.32kg |
| 6311 | Aa | 3 | | I | 5 | 点数 | 4,033 |
| その他・不明 | | 10 | | ? | 1 | 平瓦 | |
| | | | その他 | | 4 | 重量 | 1,322.86kg |
| 軒丸瓦計 | | 34 | 軒平瓦計 | | 20 | 点数 | 12,599 |

4 まとめ

(1)十五・十六坪の利用形態と性格

十五・十六坪の間には三条々間北小路が存在しない。このことは、奈良時代をつうじて十五・十六坪が一体として利用されていたことを示している。（ちなみに、十五・十六坪から東一坊大路をへだてた東隣の左京三坊二条一・二・七・八坪の長屋王邸も、奈良時代当初の長屋王邸の時代には四坪が一体として利用されていたが、その後、各坪を区切る坪境小路〈三条々間北小路と東二坊々間西小路〉が設けられている。）ただし、十五坪北辺の築地塀SA1の存在からうかがえるように、南北2つの区画に分けて利用されていたと見られる。

十五坪の中心部では、3棟の大型東西棟建物（SB14・SB15・SB16）の両側に南北棟建物、SB13・SB17を対称に置くという、従来発掘された京内の宅地あるいは宮内でも例を見ない配置が奈良時代をつうじて続いている。また十六坪では、7間四面というきわめて格式の高い建物が建てられ、京内最大の立派な井戸が設けられている。さらに、遺物では宮内の太政官推定地と同一形式の軒瓦が全軒瓦の1/4を占めるほか、塼の多さが目立つ。

こうした遺構・遺物のありようからして、十五・十六坪は、個人の宅地というよ

りも公的施設,おそらくは官衙と考えるのが妥当であろう。左京三条一坊七坪の調査(第231次)でも公的施設と見られる遺構が確認されているほか,長屋王邸のあった左京三条二坊一・二・七・八坪も奈良時代末には太政官厨家であった可能性が高い。こうした周辺地の調査成果と考え合わせてみると,平城宮南辺に接する地域一帯は,官衙的色彩の強い場所であったとみなすことができる。ところで,平安宮では一部の官衙が宮外に拡大しているが,これは各官衙(曹司)が発達して宮内におさまらず宮域の外に広がったと従来は解釈されてきた。しかし,上述のように8世紀初頭の平城宮造営当初において既にそうした状況がみられることから,従来の解釈は見直しが必要となろう。

(2) 条坊復原

今回の調査で検出した条坊遺構は東一坊坊間東小路及び両側溝である。この小路は左京六条一坊十・十五坪間でも両側溝が検出されており,それぞれの路心を結んだ直線は,国土方眼方位に対する振れが $N0^{\circ}14'44''W$,方程式であらわす

表10 関連条坊座標一覧表

| 点 | 条坊道路 | 種別 | X座標 | Y座標 | 文献 | 座標の典拠 |
|-----|----------|-------|------------|-----------|----|-------------|
| I | 二条大路 | 北側溝心 | -146005.00 | -17802.00 | 1 | 第198次A実測図 |
| II | | 南側溝心 | -146043.25 | -17802.00 | 1 | 第193次B実測図 |
| III | 東一坊坊間東小路 | 西側溝心 | -146215.00 | -18189.40 | — | 本調査実測図 |
| IV | | 東側溝心 | -146215.00 | -18182.35 | — | 本調査実測図 |
| V | 東一坊坊間東小路 | 西側溝心 | -147795.00 | -18182.35 | 2 | 市第139次実測図 |
| VI | | 東側溝心 | -147795.00 | -18175.88 | 2 | 市第139次実測図 |
| VII | 東一坊大路 | 西側溝心 | -146123.00 | -18064.38 | — | 第234-9次実測図 |
| 点 | 条坊道路 | 種別 | X座標 | Y座標 | 文献 | 座標の典拠 |
| イ | 二条大路 | 条坊計画線 | -146019.35 | -18586.20 | 3 | 朱雀門心から算出 |
| ロ | 二条大路 | 条坊計画線 | -146017.75 | -17802.00 | 3 | IとIIの1:2内分点 |
| ハ | 東一坊坊間東小路 | 路心 | -146215.00 | -18185.88 | — | IIIとIVの中点 |
| ニ | 東一坊坊間東小路 | 路心 | -147795.00 | -18179.11 | 2 | VとVIの中点 |

文献

- 1 本中 真「道路と敷地」(奈良国立文化財研究所編『平城京長屋王邸宅と木簡』吉川弘文館)1991年
- 2 鐘方正樹「平城京左京六条一坊十・十五坪坪境小路の調査 第139次」(奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度』)1988年
- 3 小澤 毅「東院南方遺跡の調査 第223-9次」(奈良国立文化財研究所『1991年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)1992年

と $X = -\tan 89^\circ 45' 16'' 20 Y - 4390482$.

表11 左京三条一坊十五・十六坪四周の座標値

415である。この直線と二条大路条坊計画線（方程式 $X = \tan 0^\circ 7' 0'' 84 Y - 145981.429$ …表10イ，ロから算出）との交差点Aの座標値は $X = -146018.535$, $Y = -18186.722$ となる。点イ（朱雀大路心と二条大路条坊計画線との交点）と点Aとの距離は399.48mとなり、これは1大尺0.3552mとして1124.7大尺。間違いなく1125大尺（375大尺×3）の計画であり、小路も計画線上に路心をあてていることを示している。なお、表11は、Aを基準とし南北方向の振れを $N 0^\circ 14' 44'' W$, 東西方向の振れを $E 0^\circ 7' 1'' S$, 隣接する条坊道路間の距離を133.2m（ $0.3552\text{m} / \text{大尺} \times 375\text{大尺}$ ）として求めた、十五・十六坪の周囲を巡る条坊計画線（二条大路以外は路心）の交点の座標値である。

| 点 | X座標 | Y座標 | 図 |
|---|-------------|------------|---|
| A | -146018.535 | -18186.722 | |
| B | -146151.734 | -18186.151 | |
| C | -146284.933 | -18185.580 | |
| D | -146018.263 | -18053.522 | |
| E | -146151.462 | -18052.951 | |
| F | -146284.661 | -18052.380 | |

（小野健吉）



図30 第IV区全景（東から）

7 東紀寺遺跡の調査 第240次調査

1 はじめに

この調査は、体育館建設にともなう事前調査である。調査期間は1993年2月10日から3月30日である。当該地は平城京外にあり、紀寺推定地の東方約100mに位置する。建設計画では、建設予定地に建っていた講堂を撤去し、より面積の広い体育館を建てることとなっていた。そこで東西約50m、南北約30mの調査区を設定し、ほぼ建築面積全体に匹敵する1500㎡余りを調査した。調査区内は講堂建設の際の造成とそれ以前の耕作により大きく削平を受け、さらに講堂基礎や建築廃材を投棄した土坑などによる攪乱が著しい。また調査区北辺部では、汚・雨水管の埋設による攪乱が現地表下1.3m前後、ないしさらに深くにまで達している。

調査区の土層は、上から造成土（厚さ1.8～0.8m）、耕土層（同20～30cm）、橙黄褐色砂質土層（同50cm）が堆積し、以下礫層と粘土・シルト層の互層が続く。橙黄褐色砂質土層以下での遺物の出土は確認できなかった。耕土層の堆積は調査区西半部に限られる。遺構は橙黄褐色砂質土層上面で検出した。



図31 第240次調査位置図 1:5000

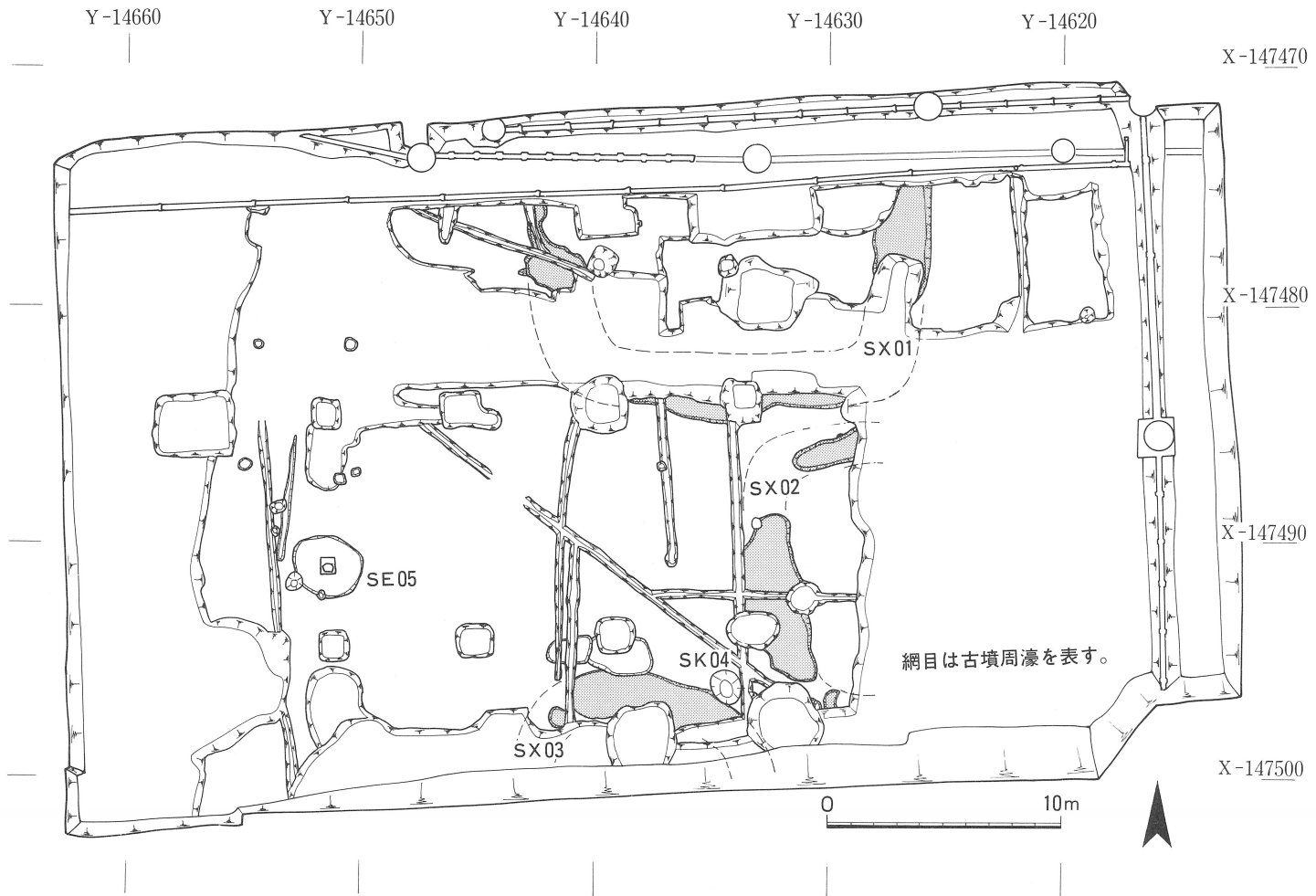


図32 第240次調査遺構図 1 : 300

2 遺 構

遺構の残りは非常に悪く、残存部分は調査区中央部に限られている。主な遺構には、古墳3基（SX01～03）、土坑1基（SK04）、井戸1基（SE05）、柱穴などがある。これらの遺構も、上半部はかなりの削平を受けている。柱穴は明確に建物としてまとまるものは確認できなかった。

SX01～03 古墳は削平・攪乱により寸断されており、全形を窺うことのできるも

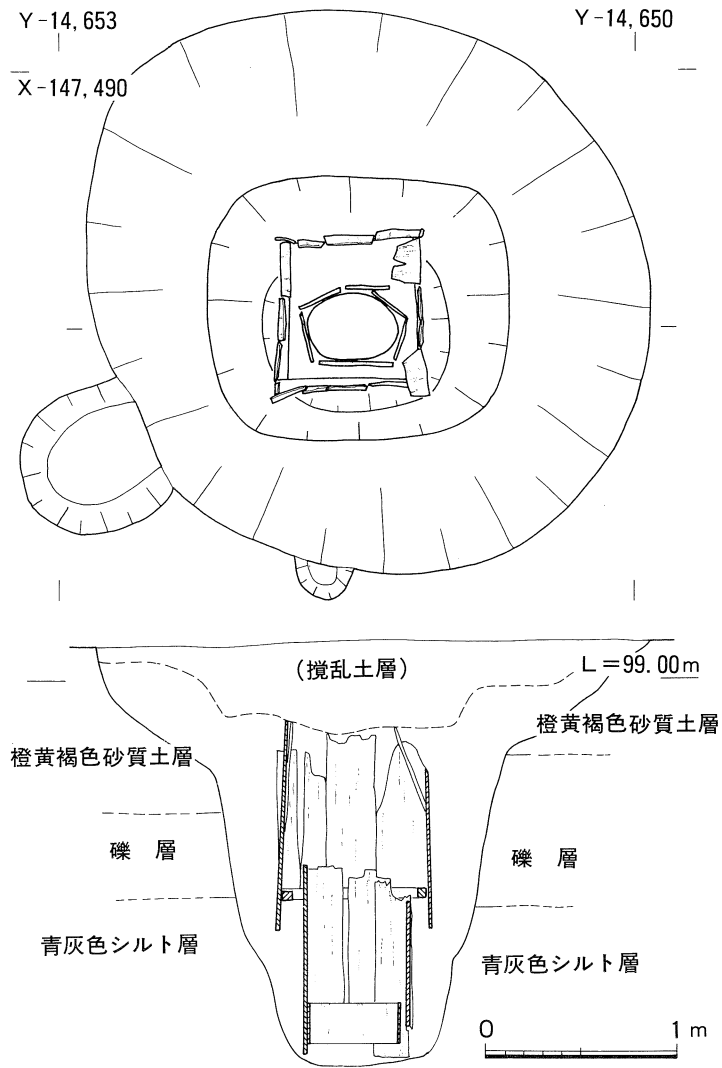


図33 井戸SE05平・断面図 1:40

のはない。周濠底部が僅かに残るのみであり、その深さは20cm前後、幅は1.5～2mである。SX01は内法で一辺12m前後の方墳になるろうか。いずれも周濠内には黒褐色の粘質土混じり砂質土ないし粘質土が堆積しており、堆積土の色調、土質は共通していた。SX01の堆積土中から埴輪小片、土師器高杯が出土した。埴輪、土師器は風化が著しく、詳しい時期は不詳。

SK04 SX03の北東部で検出した。直径1.2m、深さ30cmの円形を呈する。9世紀前半の須恵器、土師器などが出土した。

SE05 井戸枠は上半部が方形縦板組横棧留め、下半部が六角形縦板組、底部に円形曲物を据え付けている。井戸枠上半部は一辺が約90cm、高さ1m以上、六角形の枠は一辺が20～40cm、高さ約1m、曲物は直径が40～50cm、高さ20cm。現状での深さは約2.2mである。井戸掘形は階段掘りで、検出面では直径3mの円形、検出面から50cm下で段がつき一辺1.5m程度の隅丸方形に狭まり、さらに1.7m下で段がつき直径1m内外の円形坑となる。井戸枠内の埋土には9世紀前半の須恵器、土師器等が含まれており、そのころに井戸が廃絶したと考えられる。また、井戸掘形西辺部の埋土から土馬の胴部が出土したが、今回の出土状況からは井戸枠設置時の祭祀に伴うものとは断定できない。

3 遺物

今回の調査では、調査区内の削平が著しく、古代～中世・近世の遺物包含層は皆無であり、また遺構も少ないため、遺物の出土量は非常に少ない。主な遺物には、古墳時代の埴輪・土師器高杯、9世紀前半の土師器皿・須恵器壺（平城宮編年第七期）、緑釉陶器などがある。大和型の土馬胴部片が井戸掘形および土坑SK04から各1点ずつ出土したが、時期はいずれも9世紀までは下らない。その他、縄文中期土器小片1点（攪乱土出土）、軒平瓦1点（6732F）、平瓦数点、銅銭（銭文不明）などが出土した。

なお、この調査については別途報告書を刊行する予定であり、詳細はそれによりたい。（小池伸彦）

8 平城宮北方の調査 第234-6次

奈良市山陵町の八幡神社境内の建物改築に伴い、1992年6月25日から6月29日まで発掘調査を実施した。調査地は、佐紀盾列古墳群の日葉酢媛陵古墳の南。神社の本殿は古墳の周濠外堤斜面に建てられ、改築部分は本殿の南側、外堤斜面を下りた平坦面にある。改築部分に12㎡のトレンチを設定し、調査を行った。

調査地の層序は上から黄褐粘質土（盛土・厚約40cm）、明黄色粘土（厚約10cm）、礫混り黄色粘土（地山）である。掘り下げは地山上面まで行なった。遺構は調査区南壁にかかる形で浅い皿状土坑1基を検出したにとどまる。しかし、主として調査区東半部から埴輪片が多量に出土した。すべての破片が層中に無秩序に堆積し、関連する遺構は検出できなかった。神社建造時の外堤破壊の際に出土した埴輪片を盛土中に混入し、埋めたものであろう。

出土した埴輪は、現在接合・復原作業中であるが、盾形埴輪1個体以上、朝顔形埴輪数個体が存在することが判明

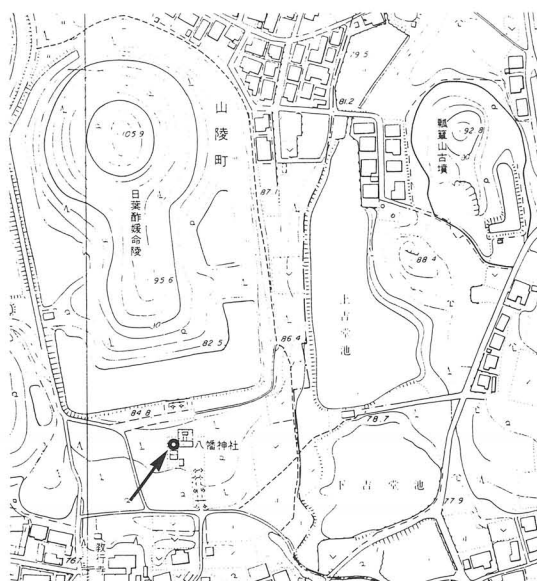


図34 第234-6次調査位置図 1:5000

している。盾形埴輪は盾面が目字形に分割される文様構成をとる。区画の厚みに差は無く、平板な盾面に沈線で区画を設ける。外周区画には平行沈線文が放射状に配され、内側の区画は無文である。朝顔形円筒埴輪は1個体が復原実測可能であった。現存長69.8cm、口縁部復原径70cm。底部を欠く。口縁より5段目に方形透孔、6段目に楕円形透孔が各2個ずつ配されている。朝顔部分の器面調整は、外面がナナメハケ、内面は断続的なヨコハケ（A種ヨコハケ）で口縁付近はその後ヨコナデを施す。円筒部の器面調整は、1次調整がナナメハケ、2次調整が継続的

なヨコハケ（B種ヨコハケ）である。焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。黒斑が見られず、窯による焼成の可能性はある。

日葉酢媛陵古墳は副葬品の一部が知られ、埴輪編年においても標識遺跡の一つとなっている。今回の出土埴輪では、盾形埴輪は装飾が簡略化されているものの、紋様構成はこれまで知られている例と共通し、時期的にも大差ないと考えられる。しかし、朝顔形円筒埴輪には、B種ヨコハケの存在、黒斑が無い点など従来の編年観ではより後出的な要素が見られる。今後の検討を要しよう。（臼杵 勲）

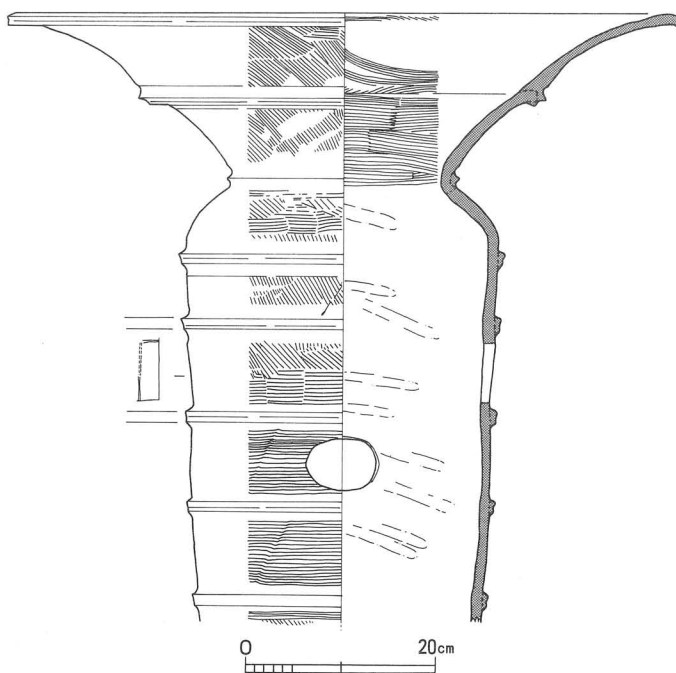


図35 八幡神社境内出土朝顔形円筒埴輪 1:8

9 東一坊大路西側溝の調査 第234-9次調査

駐車場造成にともなう調査。当該地は東一坊大路西側溝の推定地であり、同側溝の検出を目的に、5m×20mの東西トレンチを設定した。

調査地全面に厚さ約1mの盛土があり、その下に耕作土・床土があり、床土直下で灰褐色粗砂の遺構検出面となる。検出した主な遺構は、南北溝3条である。

SD3935 東一坊大路西側溝。検出面で幅6m、底で4m、深さ1.6mの断面逆台形の溝で、西岸に40-50cm大の河原石による護岸を持つ。護岸は溝肩中位から底にかけて、本来3ないし4段の石積みがあったものと思われる。ほとんど崩落するが、最上段の5個のみが原位置を保っている。埋土は上から暗灰褐色砂質土層・暗灰色粘質土層・暗褐色粘質土層・暗灰色バラス土層の4層に大きく分かれる。出土遺物では、木簡8点（内削りくず3点）をはじめ、金製飾金具断片、和同開珎6点、神功開宝1点、帯金具4点、海老錠1点・鉄釘2点など、金属器にみるべき遺物が多い。また護岸石列の南端で、籌木と思われる木製品がまとまって出土している。

SD01 幅約40cmの素掘溝で、左京三条一坊十六坪の東を限る閉塞施設の東側溝の可能性もある。また、SD02は中世の瓦器や火鉢を含む溝。

今回の調査によって、東一坊大路西側溝に、部分的にはあるが護岸の施されていたことが明らかになった。出土遺物では、上流で行われた平城宮第32次調査と似た様相を示す。最下層からも奈良時代後半の土器が出土していることから、奈良時代をつうじて溝としての機能を保っていたものと考えられる。（杉山 洋）

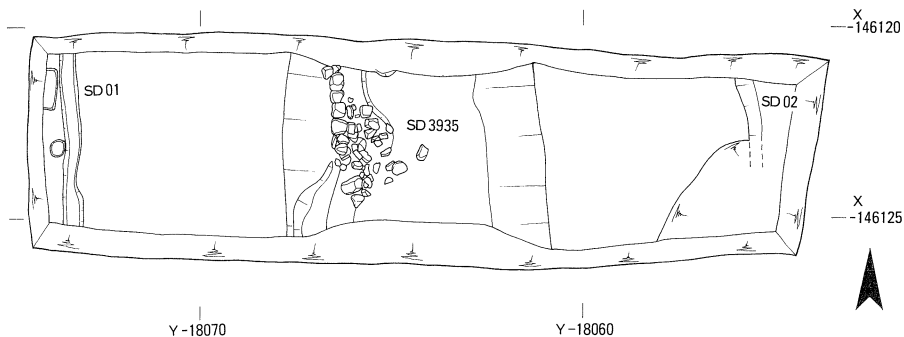


図36 第234-9次調査遺構図 1:200

10 左京三条一坊十坪の調査 第234-10次

本発掘は駐車場造成に先立つ事前の発掘調査で、調査面積は90㎡である。位置は、平城京左京三条一坊十坪の西南部。

発掘区東半で蛇行する流路SD01を検出した。SD01は、幅4～6m、深さ2mで、西北から東南方向へ流れる。堆積土は、流水時に徐々に堆積した下層（灰色砂質土）と人為的に埋めた上層（灰褐粘質土）とに分かれる。下層からは内面に放射暗文とラセン暗文をつける土師器杯Aが出土しており、平城Ⅱから平城Ⅲの古い段階まで流路として使用されていたようである。上層からは土師器碗Aが出土しており、平城Ⅲの中段階以降のある時点で流路は埋め立てられている。さらに、流路SD01に重複した位置で井戸SE02を検出した。井戸掘形は95cmの方形。内側の井戸枠には四隅に径7cmの角柱を据えて横板を一辺に一枚はめ込み、横板の外側に8枚前後の薄い縦板を立て並べている。井戸底から須恵器横瓶、広口壺と籠状の編物及び「西嶋」「西」などと書かれた木簡7点が出土した。SE02は遺物からは細かい年代を限定できないが、SD01下層の堆積のある時点で作られ、SD01上層の埋めたと同時に埋められたものと考えられる。

位置的には平安京の神泉苑に相当する本遺跡で、奈良時代の蛇行流路を検出し、池の存在を示唆する「西嶋」の木簡が出土したことは注目し得る。（山崎信二）

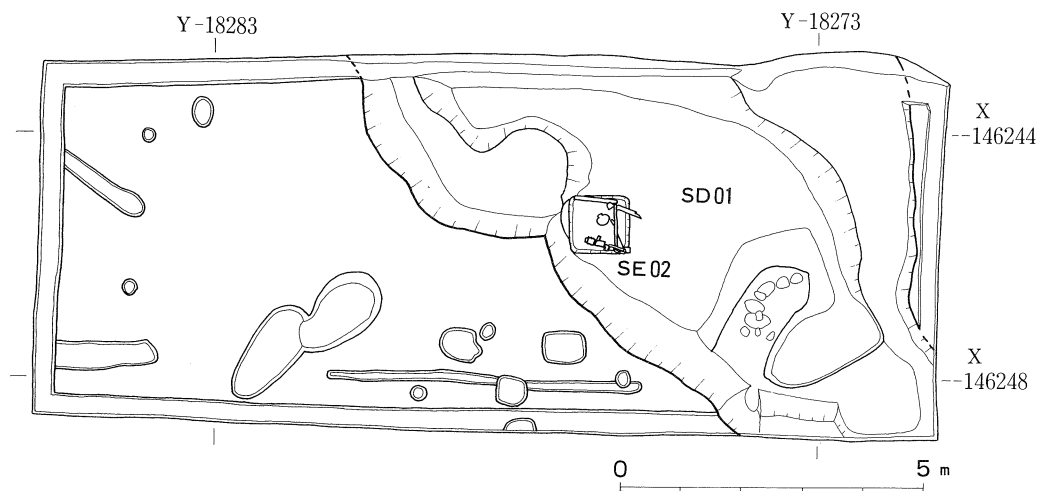


図37 第234-10次調査遺構図 1:125

11 薬師寺講堂・北面回廊の調査 第233次

伽藍復興のための事前調査として行っている、薬師寺境内の一連の発掘調査で、今年度の調査区は、1990年度の講堂東端及び北面回廊の調査区と、伽藍中軸線をはさんで東西対称の位置にあたる。調査区は現講堂の基壇の一部に及び、面積は700m²である。7月1日に開始し、9月4日に終了した。なお、回廊基壇断面に観察された噴砂の所見について、通産省工業技術院地質調査所主任研究官の寒川旭氏より寄稿を頂いており、あわせて掲載した。

1 遺 構

a. 講堂 当初の基壇土である精良な橙色粘質土が全面に残存し、北面には化粧の凝灰岩切石、南西面には雨落溝の一部を遺存している。基壇上面は削平を受けているが、礎石跡は堀形ないし抜取穴を十三箇所で見出し得た。堀形は一辺1.4～1.8mの方形で、抜取穴は不整形だが、根石を留めるものがある。これらから復原される当初の講堂の柱間寸法は、身舎桁行4.5m（15尺）、梁行5.1m（17尺）、廂の出3.0m（10尺）と、1990年度調査の知見と一致する。ただし今次の調査では裳階の痕跡は全く見出されなかった。

北側に残る凝灰岩地覆石の幅は25～35cmで、長さも60～140cmと一定しない。いずれも外側は風化が進んでいる。地覆石は現状の外端から約6cmほどの所で一段くり込みを入れて内側を1.5cm低くし、羽目石との仕口としている。羽目石は全く残されていない。基壇の周囲は一帯が瓦片を含んだ整地層となっているが、この部分では断割調査は行っておらず、築成の状況や回廊との取り付け状況の解明等については講堂全体の調査にゆだねたい。

基壇西南部では雨落溝の側石である二条の玉石列ないしはその抜取跡が断続的に残る。雨落溝の内法幅は35～40cmほどに復原される。

b. 回廊 北面回廊は講堂基壇の西端から西へ32mに亘って、これまでの知見と同様、単廊・複廊の二時期の礎石据付穴を重複して検出した。基壇土は地山の上に一層積むのみで、基壇の高さに応じて東端が最も厚く、発掘区西端では削平もあっ

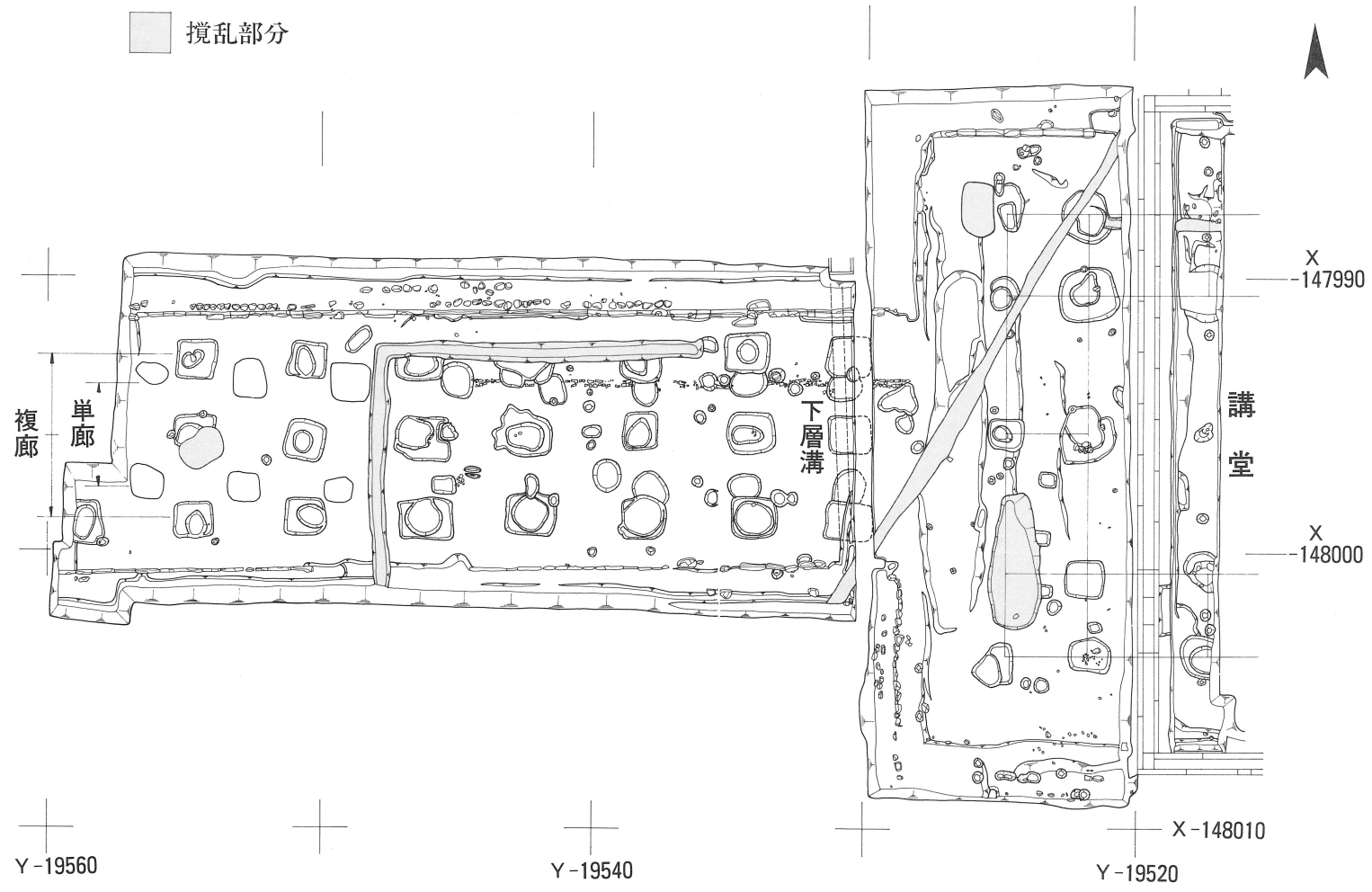


図38 第233次調査遺構図 1:250

てほとんど残らない。

単廊 単廊は桁行・梁間共に3.7m（12.5尺）に復原され、講堂取付部を含めて8間分を確認した。最も残りのよい東端部、特にとりつきから2間目周辺では、上面の化粧ないしその下地と思われるしっくい層が残存しており、またとりつきを含め東から5間目までの、北すなわち外側の柱筋上に、瓦片を並べた、連子窓腰壁の壁持地覆を検出したことが特記される。これは単廊についての、これまでの調査を通じて初めての知見であり、単廊がある程度建ち上がっていた可能性を明らかにしたといえよう。また、単廊の南北両側は、複廊への改修時に付加された基壇土が一層覆うが、その北側下層で、当初の単廊基壇を整形した端部を確認しており、柱筋からの出は1.3mである。従ってこれにさらに化粧の側石が加わると想定すれば、単廊の基壇の出は5尺、基壇の総幅は22.5尺の計画であったと推定できる。

複廊 礎石据付穴及びそのほとんどの抜取穴を回廊取付を含め7間、さらに発掘区を拡張して南側柱のみもう1間、計8間分検出した。拡張部分で南側の化粧石はなお入隅に達せず、西面回廊までは少なくとももう1間以上あることとなる。基壇北面の地覆石は風化を受けて上外角を失いながらもほぼ完存しており、最東部では羽目石の残欠も残されていた。地覆石の幅は24～33cm、高さは約24cmで一定である。一方、羽目石は厚さ約15cm、高さについては、北側へ転落した一枚が全高を留めており、38cmという値を得た。これは基壇高を復原するに際しての有効な根拠となる。

これに対して、南面の化粧石は羽目石状の板石であるが、足元で幅を広めており、地覆石と羽目石を一体とした形式というべく、北面とははっきりと様相を異にしている、回廊内外の意匠のちがいを示している。

柱間寸法は、今回の調査では桁行4.05m（13.7尺）、梁行2.95m（10尺）という計測値を得た。基壇幅は9.6m（32尺）であり、基壇の出が6尺に復原されることを合わせて、梁行は明らかに尺の完数となるが、桁行についてはなお検討を必要とする。このことについては、後にあらためて述べる。

北雨落溝 地覆石外側に玉石を並べ、約40cmの間隔を置いてもう一列の玉石列が

ある。この間が雨落溝となるが、底石はない。雨落溝の心は地覆石外面より60cm(2尺),従って複廊の軒の出は8尺に復原される。

下層溝 発掘区東寄りに南北に設定した断面観察用の畔際を掘り下げた所,ちょうどそのトレンチにはほぼ一致する位置に,基壇下層の南北溝を検出した。幅は40cm,残存深さは約10cmである。方向は回廊の梁行より北でやや西へ振れ,埋土には遺物を一切含まない。粘土でていねいに埋め戻されており,回廊基壇造成に先立つ仮設の排水溝ないしは地割りの溝と考えられる。

その他の遺構 回廊東端部の基壇上部で,径50~60cmの径6個の柱穴を検出した。柱筋が東西・南北に通っており,東西2間(柱間2.4m),南北1間(柱間4.3m)の平面を考えることができる。北中央の柱穴中には上面の平坦な自然石が残り,中近世の建物ないしその一部と推定される。

2 遺物

土器類はわずかで,ほとんどが瓦で占められる。内訳は表12のようであり,境内他地区と同様奈良時代の軒丸瓦では6276形式,軒平瓦では6841G形式が卓越している。また軒丸瓦では天禄火災後のものと考えられる39形式が特に多くを占めるのが注目されよう。この他に中・近世の瓦の量も多い。

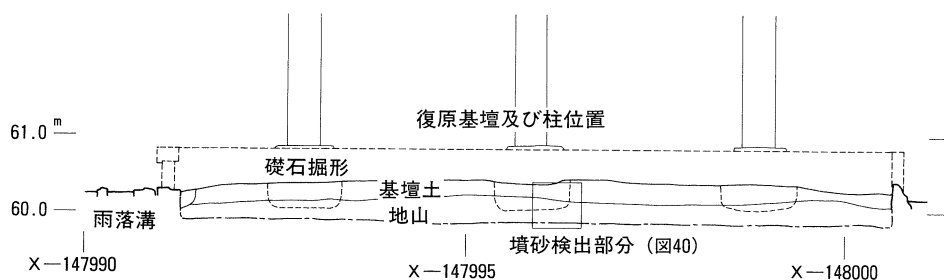


図39 回廊基壇断面図及び復廊復原図 1:100

3 ま と め

本調査の新知見と問題点を再録して、まとめとする。

a. 北面回廊の規模 2次に亘った北面回廊の調査では、いずれも隅の検出には至っておらず、その東西規模は確定していない。1990年度の調査では、講堂には『縁起』に記すごとく裳階があったと考え、その出を6.25尺とし、講堂の桁行総長を137.5尺（裳階を除き125尺）と復原しているが、今回の成果も基本的にはこれに矛盾しない。今回検出した単廊東端の推定柱位置から講堂側柱までの距離5.6mを、18.75尺と考えると、裳階への取付の柱間は12.5尺となって柱間と等しく、さらに単廊の距離を、隅の間を含めてこれまでの推定通り片側各11間とすると、総長412.5尺、すなわち東西回廊の心々で400尺という完数を得る。そもそも講堂の桁行総長137.5尺という数値自体が、12.5尺の11倍に他ならず、単廊の東西規模400尺と、それを32等分した12.5尺というひとつの基準寸法が、講堂の規模設定とも密接な関係を持っていたことが明らかであろう。

これに対して複廊の柱間寸法については、梁行の10尺は動かず、梁行は東半での推定（13.5尺）とは異なって13.7尺が妥当と考えられた。また、東半では複廊西端、すなわち講堂への取付の柱の礎石跡を未検出であったが、今回取付部分の寸法が講堂側柱まで5.4mであり、単廊よりやや短いことを確認した。これを仮に18尺と考え、複廊の規模を隅の間を含めずに片側8間と仮定すると、東西規模は心々で400.5尺となって、ほぼ単廊と等しい値となるのが注目されよう。むしろ講堂への取付寸法の考えかた次第では、複廊の東西規模も単廊を踏襲していると復原され得る。

b. 単廊造立と移築の可能性 すでに述べた通り、講堂に近い部分で単廊地覆の瓦列をはじめ検出し、これまでの「単廊の礎石を据えた程度の段階での複廊への計画変更」と言う推定の段階から、単廊自体がある程度建ち上がっていた可能性、さらには本薬師寺からの回廊の移築の可能性をも検討する必要が生ずるに至ったといえよう。しかし本薬師寺の回廊の調査は未着手であって、この点の解明は今後の重要な課題である。 (松本修自)

4 薬師寺の発掘調査で検出された地震の液状化跡

近年、地震の痕跡が各地の遺跡発掘現場で検出されるようになった。1)地震の痕跡の中で最もよく検出されるのが液状化現象の跡である。この現象は気象庁の震度階VI（特に液状化し易い条件下ではのV上位）以上で顕著に見られる。液状化現象は、地下にゆる詰まりの砂（礫）層などが存在し、地下水で満たされた状態で激しい地震動を受け発生する。まず、震動によって、砂（礫）の粒子はお互いの支えがはずれて移動する。この際、粒子間のすき間を小さくしてより安定する方向へと動く。一方、すき間を満たしている地下水の側では、急に圧迫されるので水圧が急上昇する。やがて、水圧の上昇した地下水が逆に砂粒や周囲からの土圧を支えるようになり地層が液体の性質をもち、液状化の状態になる。さらに、上位の地層を引き裂きながら、水・砂が地表に流出することになる（噴砂現象）。

今回の薬師寺跡の発掘調査においても、過去に激しい地震動が存在したことを示す液状化現象の痕跡が検出された。これは、図40のように、現地表面下140cm以深にある砂層の上端が液状化して、噴砂が発生したものである。砂層から上昇する噴砂の通り道（砂脈）は下部では最大幅9cmで、上に行くにつれて分岐し、幅1～1.5cmの複数の細長い砂脈になる。薬師寺回廊の創建基壇を引き裂いているこ

表12 第233次調査出土瓦集計表

| 軒丸瓦 | | | 軒平瓦 | | | | 道具瓦 | | | |
|------|---|----|------|---|----|-------|-----|----|-------|-----------|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 種類 | 点数 |
| 6276 | A | 1 | 6641 | G | 1 | 298 | | 4 | 熨斗瓦 | 1 |
| | ? | 1 | | H | 4 | 300 | | 3 | | |
| 6307 | C | 1 | | I | 4 | 305 | | 3 | 面戸瓦 | 1 |
| 37 | | 1 | | K | 1 | 317 | | 1 | 隅切平瓦 | 1 |
| 38 | | 1 | | O | 1 | 345 | | 1 | 烏 衾 | 1 |
| 39 | | 2 | 6647 | F | 1 | 351 | | 1 | | |
| 40 | | 1 | | ? | 1 | 359 | | 2 | | |
| 42 | | 3 | 6663 | ? | 1 | 361 | | 3 | | |
| 43 | | 3 | 6664 | O | 5 | 366 | | 1 | | |
| 60 | | 1 | 6665 | B | 1 | 368 | | 1 | 凝 灰 岩 | |
| 76 | | 1 | 236 | | 5 | 新型式 | | 1 | | |
| 82 | | 1 | 237 | | 1 | 型式不明 | | 2 | 点数 | 2 |
| 90 | | 1 | 238 | | 2 | | | | | |
| 菊花文 | | 1 | 241 | | 6 | | | | | |
| 巴文 | | 3 | 245 | | 4 | | | | | |
| 型式不明 | | 3 | 246 | | 5 | | | | | |
| | | 6 | 253 | | 1 | | | | 丸 瓦 | |
| | | | 254 | | 1 | | | | 重量 | 540.9kg |
| | | | 256 | | 1 | | | | 点数 | 3,754 |
| | | | 263 | | 1 | | | | | |
| | | | 269 | | 1 | | | | 平 瓦 | |
| | | | 278 | | 1 | | | | 重量 | 1,539.6kg |
| | | | 285 | | 1 | | | | 点数 | 12,864 |
| | | | 294 | | 3 | | | | | |
| 軒丸瓦計 | | | 軒平瓦計 | | | 1 1 0 | | | | |

とから、8世紀以降に発生した地震の痕跡と考えられる。²⁾

図41は液状化した砂層の粒度組成を篩分け法によって分析したもので、径0.25mm（中粒砂）～径1mm（粗粒砂）の粒子が卓越している。また、この曲線から図学的に求めた砂の平径粒径は0.47mm（中粒砂）、分級度は0.99（普通）となり、粒度組成から考えて、きわめて液状化し易い砂層と考えられる。

薬師寺には過去の地震によって被害をうけた記録がある。まず、『大乘院寺社雑事記』には「明応三年五月七日（1494年6月19日）、午刻大地震、以外事也、東大寺、興福寺、薬師寺、法花寺、西大寺、矢田庄在々所々、破損損亡、珍事、大略及転倒了」とある。³⁾ これは、奈良県北西部に震源をもつマグニチュード6.0程度の内陸直下型地震によるもので、被害もさほど大きくはない。また『中右記』には「十一月二十四日（1096年12月17日）、辰時許地大震（中略）後聞、地震の間、近江国勢多橋破了、纔東西片返残也、東大寺鐘落地者、薬師寺廻廊顛倒、東寺塔九輪落、法成寺東西塔立成金物落損、法勝寺御佛等光多損、凡所々塔多損云々」とある。³⁾ これは、日本列島の南の海底にのびるプレート境界（南海トラフ）で発生した巨大地震（永長東海地震）によるものでMは8.0～8.5の間に推定されている。

図42のように、南海トラフの東半部で東海地震、西半部で南海地震が概ね100～150年の周期で、ほぼ同時又は二年以内に発生している。¹⁾

当遺跡において認められた液状化跡は、奈良盆地でははじめて検出されたもの

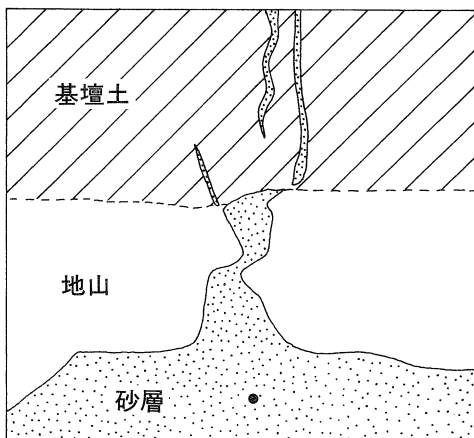


図40 液状化跡の断面図 1 : 10

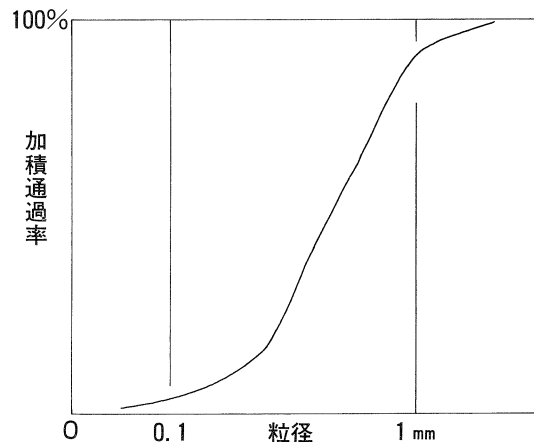
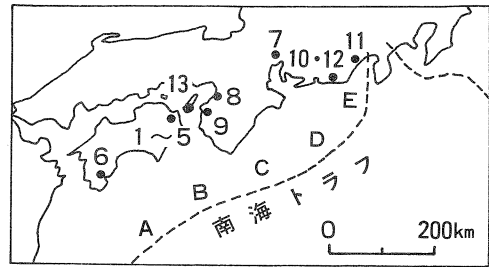


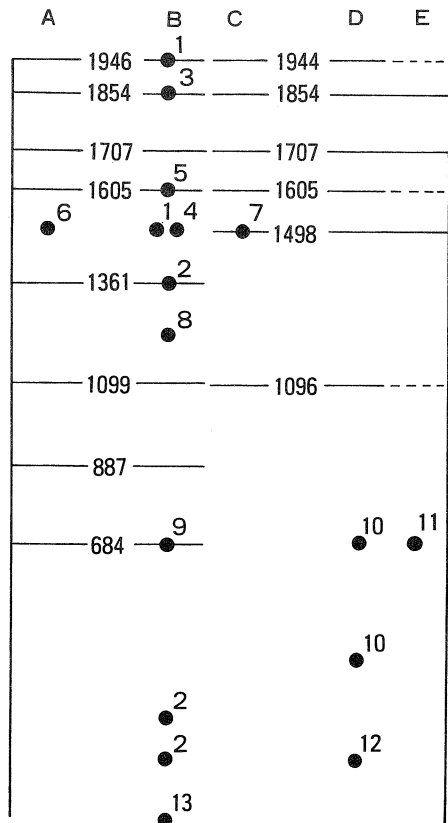
図41 液状化層の粒度組成

である。しかし、規模は小さく、震度Vの上位程度の地震動でも生ずる可能性がある。時代は8世紀以降に限定されており、奈良盆地周辺の内陸地震、又は、くり返し発生している東海、南海地震のいずれかによるものと考えられる。今後、周辺地域の遺跡においても、地震の痕跡が検出される可能性があり、発掘調査の際留意して頂けるようお願いしている。 (寒川 旭)



注

- 1) 寒川旭(1992)『地震考古学—遺跡が語る地震の歴史—』中公新書, 251Pなど。
- 2) 奈良国立文化財研究所の金子裕之氏に地層の年代について御教示頂いた。
- 3) 文部省震災予防評議会編(1941)『増訂 大日本地震史料・第一巻』鳴鳳社, 945Pに収録。宇佐美龍夫(1987)『新編日本被害地震総覧』東京大学出版会, 434Pにも紹介されている。



南海地震

東海地震

- 1 宮ノ前遺跡 2 黒谷川宮ノ前遺跡
- 3 神宅遺跡 4 古城遺跡 5 黒谷川古城遺跡
- 6 アヅノ遺跡 7 尾張国府跡 8 石津太神社遺跡
- 9 川辺遺跡 10 坂尻遺跡 11 川合遺跡 12 鶴松遺跡
- 13 下内膳遺跡

(●は遺跡で地震跡で地震跡が見つかったもの)

図42 南海地震と東海地震の発生時期

12 頭塔の調査 第237次

1 はじめに

奈良県教育委員会が行なう頭塔の復原整備に伴う調査である。県の委託を受けた奈文研は1987年の第181次調査(頭塔の北東部)、1989年の第199次調査(頭塔の北西部)、1990年の第232次調査(東面中央トレンチ)を行ない、頭塔の規模、構造、変遷等を明らかにした。

今年度は昨年設定した東面中央トレンチをさらに掘り下げ(A調査区)、積土内部の築成手法等を明らかにするとともに土層断面



図43 第237次調査位置図 1:5000

面のはぎ取りを行ない、断面の記録保存と将来の活用に備える調査を行なった。また、今年度は県が策定した復原整備基本計画に基づき、東面北半部の基壇及び塔本体の石積を修理、復原することになり、これに伴い石積の解体工事を行なった。最下段の積石は基本的に解体しない方針であったが、樹木の根に押されるなどして傾いている部分が2ヶ所あり、この石を一旦取り外し据え直すこととなった。その際、この部分にトレンチを設定し(B・C調査区)内部の状況を調査した。調査の目的は第一段石積の下にもぐり込んでいる礫層および石敷の拡がり、現存する石積との関係などを明らかにすることである。

2 遺 構

下層石積 A調査区では現存する石積内部でもう一つ別の階段状の石積及び仏龕状の石積を検出した。ここでは以前から確認している七段の塔本体石積を上層石積、今回発見した積土内部の石積を下層石積と呼ぶ。下層石積の平面位置は上層第二段石積から第四段石積の間で上層第一段石積前面から約1.7mのところである。下層石積は基底部分が2段の階段状を呈しており、その上に径30~50cmの石を



図44 頭塔北東部遺構図（朱線は第237次） 1:150

5～6段に積む。残存する石積の高さは約1.8mである。下層石積の上半部はトレンチ北壁から約30cm南のところで西へ折れ、約1.7m延びて再び南に折れる。一方、下層石積の下半部はまっすぐ南に続く。つまり、石積上半部が「コ」字形に入り込んだ形を想わせる。入り込み部の上面にはほぼ全面にわたって石が敷かれてお

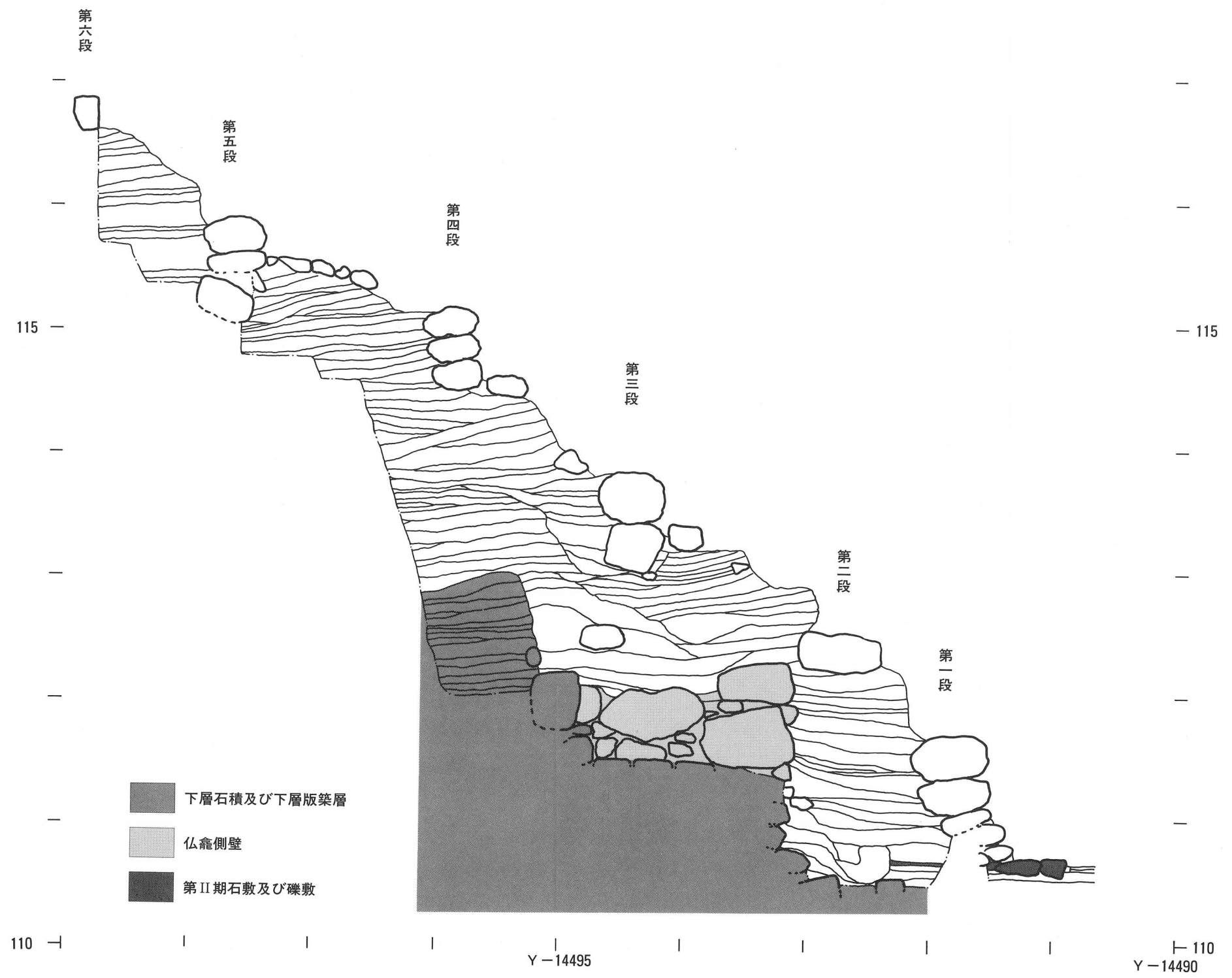


図45 A調査区北壁土層図 1:40

り、石敷の高さは約1.1mである。さらに、この入り込み部の奥壁石の前面には石敷を約30cm埋めた上に板状の石が敷かれた時期がある。さて、この入り込み部が仏龕をなし、かつ、上層と下層の東西中軸線が一致していたと仮定するとこの仏龕は幅約1.6m、奥行き1.7mとなる。なお、奥壁裏込部には下層石積に伴う版築層が標高約113mまで残る。残存する奥壁石の上に上層石積東面第1段中央石仏(高さ約1.1m)がのっていたとすると石仏天端の標高は約113.3mとなり、下層第一段石積の高さは約2.8mに復原できる(ただし、石積上のテラスは平坦なものとする)。

A調査区で下層石積を発見したことから、この石積の北延長部をB、C調査区でも確認すべく調査を進めた。その結果、B調査区では同様の形状をもつ石積を検出できたが、C調査区では検出できず北端を確認することはできなかった。石積の高さは不揃いで高いところでも約1.3m残すのみである。下層石積は後述する理由から第I期の遺構と考えられ、その方位は第I期基壇上面石敷と同様、ほぼ国土方眼座標系の方位に一致する。

基壇上面石敷 前回までの調査で基壇上面には3時期の変遷がみられ、上層石積は第III期の基壇上面舗装を伴うことが確認されていたが、第I期基壇上面石敷および第II期基壇上面礫敷(一部石敷を伴う)は上層第1段石積みの内側に入り込むためその幅は不明であった。この第I期石敷はB調査区で下層石積の階段状の基底石に接続し、その幅が約2.3mであることを確認した。なお、この石敷はB調査区では内側が約2%の勾配で低くなっているが、C調査区で確認した石敷は外側へ傾斜している。傾斜方向の違いは永年の不等沈下によるものか、施工の差を示すものかは不明である。

礫敷 第II期の基壇上面舗装は第I期の石敷を約10cm埋めた上面に径数cmの礫を敷く。この礫は上層第1段石積の内側へ潜り込むが、B調査区では第1段石積前面から約1.6m奥で、A調査区では約1m奥で消滅する。これは攪乱あるいは削平によるものである。一方、C調査区ではトレンチ全面にわたって礫敷が確認された。礫敷は内側が高くなっており、その延長は下層階段状基底石2段目上面付近にあたる。

3 遺物

土師器(皿C)1点がB調査区上層石積に伴う版築層から出土した。また、丸瓦73点平瓦368点が上層石積に伴う版築層から出土した。なお、A調査区の下層石積に伴う土層からは遺物は見つからなかった。

4 まとめ

今回の調査で塔本体の七段石積造営以前に造られた下層石積があることを発見し、下層石積の一部は仏龕と考えられる遺構をもつことがわかった。また、下層石積は基壇上面で既に検出されている第I期石敷を伴うことが明らかになった。ところが、下層石積全体の規模、構造は不明であり、神護景雲元年(767年)に東大寺の僧実忠が築造したという「土塔」は上層遺構をさすのか、新たに検出した下層の遺構をさすものかは現段階では断定できない。今後の調査では下層石積の規模、構造、築造時期等を明らかにするとともに、下層石積と第II期基壇上面舗装の礫敷のつながりについても調査する必要がある。

(内田和伸)



図46 A調査区(下層石積, 仏龕)



図47 B調査区(下層石積, 第I期石敷)

13 東大寺南大門の調査 第234-2次

1 はじめに

東大寺南大門阿形像解体修理とともに、再安置の際の基壇上面の整備のために掘り下げを行うこととなり、そのための地下調査を4月2日からのべ6日間行った。今回の調査は阿形像側の地下調査の所見に基づき整備が目的であるので、対象を制限し、原位置を保っている台石は現状のままとどめ、掘り下げも阿形側で確認された鎌倉時代の面を目安として、10cm程度行うこととした。調査面積は約13m²である。

2 調 査

阿形像を支える台石は調査区の北側と南側つまり像の左右の足下に2カ所設置されていた。それぞれ礎石を転用した径70cm程度の円形石2個と礫石により構成されていた。いずれも遺存状況が良好であったので、そのままにして周囲のみを掘り下げることとした。

今回掘り下げた部分には、上から1層・三和土、2層・明褐色砂質土、3層・暗黄褐色土、4層・褐色土という層序が認められた。三和土は台石の周辺と調査区西側ではよく遺存していたが東側では痕跡が残るのみであった。2層は厚さ約2～4cmで調査区全体に見られた。層中に小礫、漆喰片、瓦片を含む。3層は固く締められているが、調査区東側ではほとんど堆積していなかった。

掘り下げは調査区東側から開始したため、2層除去後すぐに4層が露出した。そこで全体を4層上面まで掘り下げることとし、調査区西側でも3層までの除去を開始した。掘り下げを進めていくと、それぞれの台石の周囲で3層が4層に落ち込み、台石据え付け掘形と判断できた。そこで、掘形の外形を確認して掘り下げを終了し、その後南側の掘形に幅約30cm、深さ約40cmの試掘坑をあけて断割調査を行った。

検出した遺構は以下のとおりである。(図48)

SX512 阿形像右足元の東西に並ぶ2石の台石。ともに礎石を転用したもので、

上面に径70cmほどの円形の作り出しを持つ。西側の台石作り出しは耳状の作り出しを持つ。それぞれの台石の中央には、本来あった突起を削り、平らにした痕跡がある。据え付けのための掘形は第4層を掘り込み、長約250cm、幅約180cm、の不整隅丸方形を呈する。断割の断面から見ると、掘形内に褐色砂を埋めた後、3層の暗黄褐色土を充填しながら台石を固定している。台石保持のため、掘形底部まで掘り下げていないので根石は確認していない。

SX513 阿形像左足下の東西に並ぶ2石の台石。ともに礎石を転用したもので、上面に径70cmほどの円形の作り出しを持つ。それぞれの上面には突起を削った痕跡が見られる。掘形は南側部分のみを確認した。長約200cmである。一部掘形内部の3層を除去した結果では、掘形埋土はSX512と同様と考えられる。

SX514 SX512北側に据えられた3石の上面の平らな自然石。上面の高さはSX512と一致する。SX512の掘形内に3層によって固定されている。

SX515 SX513南側に据えられた2石の自然石。石の上面の高さはSX513とほぼ一致する。SX513の掘形内に3層によって固定されている。

SX516 SX513西側の礫敷。長20～30cm程度の自然石を用いる。礫上面の高さはSX513より3～5cm程度低い。ここでは掘り下げを行っていないが、東側では石は4層上面に3層により固定されていた。掘形内部でも同様であろう。

SS517～522 台石周囲の6個の足場穴。平面形はすべて径約40cm程度の円形である。ただし、SX521のみは、抜き取りによるものか上端が南側に伸びる不整楕円形を呈する。埋土は明褐色砂。昭和5年の解体修理の際の足場穴と思われる。

SS523 調査区南側に位置する浅い皿状土坑。埋土は明褐色砂。やはり解体修理の際のものと思われる。

また、調査区西南部で、4層上面に炭化物・焼土が広がっているのを確認した。ただし、堆積は非常に薄く、炭化物・焼土ともに粒子状にまばらに分布しており、火災などによるものとは考えられない。また、この広がり台石掘形に切られ、台石設置以前の堆積である。

遺物は、足場穴と2層中から近世の陶器片・瓦片、寛永通寶などの貨幣、石片、鉄

片、4層上面でかわらけの小片が出土した。

3 まとめ

今回の調査で阿形像基底部について、一定の知見を得ることができた。まず、SX512・513の掘形は4層から掘り込まれ、3層を敷き固めて台石を固定し、同時にSX514～SX516を固定したことが確認できた。基底部の形成は卍形像側でも同一である。また前回の調査では4層以下が創建当時の基壇と推定された。今回はそれを裏付けることはできなかったが、4層上面の炭化物・焼土の広がり、ある時期にそこが基壇上面であった可能性を示している。また、今回の調査でも火災の痕跡を検出できず、南大門焼失の可能性はさらに弱まったといえる。(臼杵 勲)

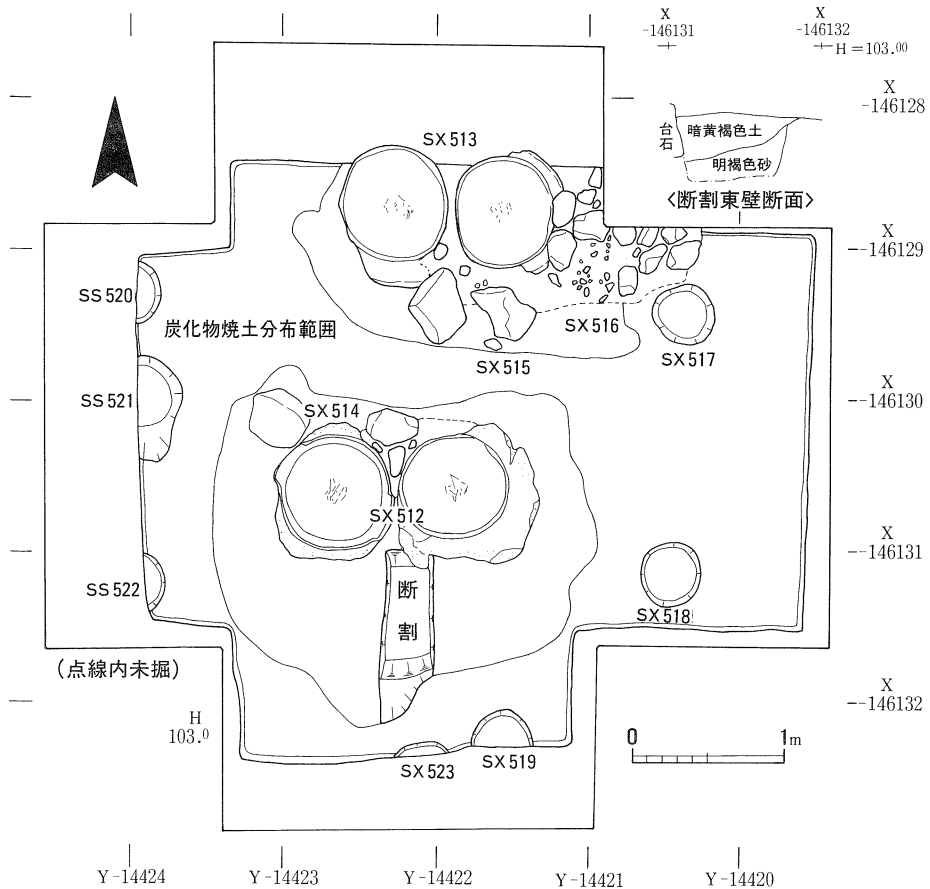


図48 第234-2次調査遺構図 1:50

14 法華寺旧境内の調査 第234-3, 15次

1 はじめに

第234-3次調査は住宅建設予定地の事前調査, 第234-15次調査は市の下水道工事の事前調査である。双方とも推定金堂位置に近く, 遺構が関連するため一括して報告する。法華寺金堂については, 第82-6次および第98-21次調査で, 前身の掘立柱の抜取穴に凝灰岩の根巻き石を投

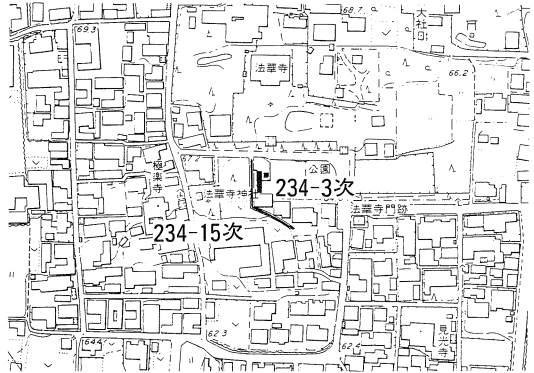


図49 第234-3, 15次調査位置図 1:5000

棄し, その上に礎石を置いたと思われる柱穴一個を含む, 4間分の柱列を検出している。また今回の調査区北にあたる講堂推定位置では, 第95-8次調査および昭和62年度の奈良市による調査で¹⁾, 3期にわたる遺構, それぞれ法華寺造営以前の10尺等間の掘立柱建物, 14尺柱間で根巻き石をもつ掘立柱建物, 凝灰岩の基壇をもつ法華寺講堂と思われる建物を検出している。また昨年, かつて福山敏男氏が復原・研究した「造金堂所解」が, 法華寺阿弥陀浄土院の金堂ではなく, 法華寺金堂そのものの史料であるという研究が発表されている²⁾。以上を勘案しながら今回の遺構を検討する。

2 遺 構

第234-3次調査

調査区は全体に後世の削平が著しい。基本的な層序は置土, 近世の暗灰色褐土, その下に黄茶褐色粘土などの薄い層を挟んで地山の黄灰色粘土にいたる。検出した主な遺構は, 掘立柱建物SB02と, それに切られたより古い掘立柱遺構SB03, そして礎石建て建物SB04である。SB02は, 後述する第234-15次調査で関連する遺構を検出し, 両者を合わせると10尺等間で東西方向と南北方向に3間づつを検出した。この北方には先述の講堂関連の調査区があるが連続する遺構がないので, この建物は北方にあと1間しか延びる余地はない。したがって梁行3~4間の東西

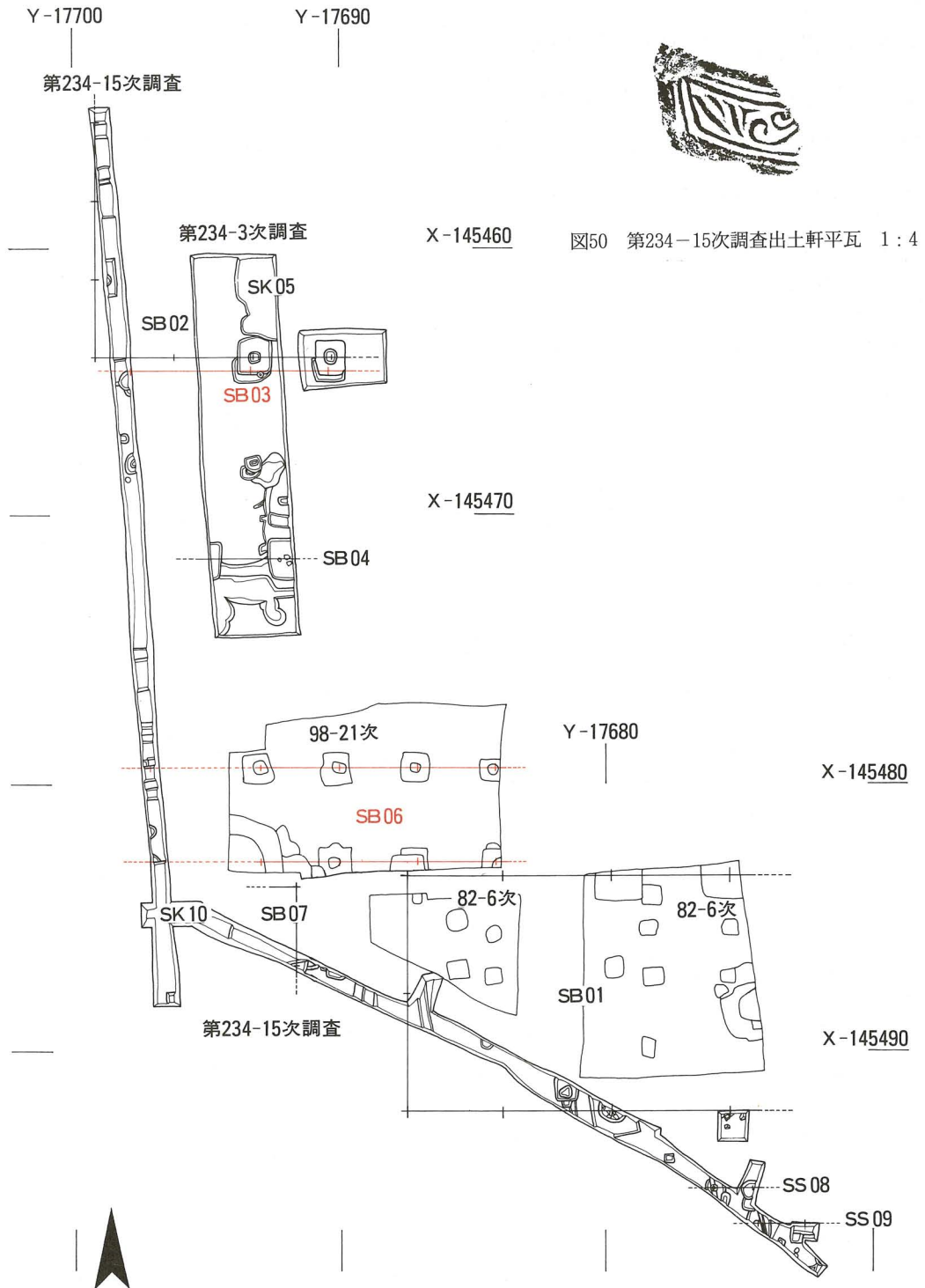


図50 第234-15次調査出土軒平瓦 1:4

図51 第234-3, 15次調査遺構図 1:250

棟建物と推定される。SB03は、第234-3次調査区内では10尺柱間であるが、第234-15次で西方15尺の位置に柱穴1個を検出しており、これも連続するか、あるいは無関係に等間で延びるのかは不明である。SB04は、後述する推定金堂建物SB01のように堀立柱の前身遺構を持っておらず、礎石建で新造されているが、検出範囲が少なく現時点では性格不明である。

第234-15次調査

調査区は道路に沿って南北方向と、北西から南東にむかう斜め方向の2本のトレンチからなる。

南北トレンチの北では、先述のごとく第234-3次調査の建物SB02, 03と一体の柱穴を検出した。またSB03の南には、柱筋を揃えた小規模な堀立柱柱穴があり、また第98-21次で検出しているSB06の西への延長においても、等間ではないが柱穴を検出した。南端の2本のトレンチの交点部分は、鎌倉時代の遺物を含む大きな土坑SK10が占める。

斜めのトレンチの南では、明白な根石をもつ礎石柱穴を2ヶ所検出し、1ヶ所では約1.8mの方形掘形を埋め戻し、その上に根石が据えられていることを確認した。これはすぐ北の第82-6次調査で検出した柱穴と性格が類似しており、その南北間距離も約30尺と適当であるため、このSB01を金堂身舎と推定した。東西方向の柱間は14~15尺である。この場合問題となる庇柱については後述する。

その南では5尺間の堀立柱SS08と6尺間の堀立柱SS09を検出した。柱間が小さいので柵列かと思われるが、建物の一部である可能性もある。周辺ではより古い小柱穴5個を検出している。両者ともに、SB01の礎石掘形底よりも高い位置まで掘形が確認されたので、SB01の基壇が地山削りだして造成されたので残ったと思われる。西北でも大規模な堀立柱掘形の一部を検出し、第98-21次のもものと合わせSB07になるとと思われる。

3 遺物

第234-3次では、近世の土坑SK05から多量の瓦、凝灰岩、緑釉の磚、土器類が出土した。軒丸瓦は6138A, 軒平瓦は6667A・C, 6713A, 6714Aを含む。また凝灰岩は

近辺のものが投棄されたのであろうから、この辺りに凝灰岩基壇が存在したと思われる。土器などは少なく特記すべきものもない。

第234-15次では、SB01の礎石根石中から、奈良時代の新種の軒平瓦が出土した(図50参照)。他には奈良時代の平瓦1個と、SK10から鎌倉時代の瓦が数点出土した。土器類は点数も少なく特記すべきことはない。

4 ま と め

今回の調査で最も注目すべき成果は、金堂のものとみられる礎石根石を2ヶ所で検出したことである。しかしながら問題は庇柱が検出されていないことである。身舎柱から庇柱までの出は、11尺から14尺までの可能性があるが³⁾、第98-21次調査でその範囲に礎石掘形を検出していない。したがって可能性としては、SB01は、前身建物の位置・規模をそのまま踏襲したのではなく、庇柱位置では礎石を新たに据え、その掘形が浅かったために削平された場合が考え得る。庇柱の位置での遺構面の海拔高度は65.6~66.0m、身舎の礎石掘形の底は65.5~7mであり、可能性はあろう。しかしながらこれまで伽藍中軸とされていたY=-17,686付近が、SB01の西端になることや、第174-22次調査で検出した東西方向の雨落溝が回廊のものとするれば、SB01の北庇に接続し、これまで知られる伽藍配置とは異なることなど、不審な点も多く、今後の調査で庇柱および妻柱の検出を待たなくては結論が出ない。SB02, 03は、法華寺が礎石建で整備される以前の建物であろう。法華寺の前身建物か、それ以前のものかは不明である。

- 1) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書・昭和62年度』昭和63年。
- 2) 福山敏男「奈良時代に於ける法華寺の造営」(『日本建築史の研究』桑名文星堂) 昭和18年。黒田洋子「正倉院文書の一研究-天平宝字年間の表裏関係から見た伝来の契機-」(『お茶の水史学』第36号) 1992.11。
- 3) 福山が推定したのは、桁行11, 14, 16, 17, 16, 14, 11尺, 梁行11, 14, 14, 11尺である。これ以外に、庇天井板の長さ14尺, 幅1尺, 枚数262枚から、庇柱間を14尺とすれば庇総面積 $14 \times 262 = 14 \times (30 \times 2 + 14 \times 4 + \text{身舎桁行総長} \times 2)$ より桁行総長が73尺となり、これより桁行柱間は14, 14, 15, 15, 15, 14, 14尺となる。(藤田盟児)